

パウル・ツェラン——「灰色の言葉」へ

Paul Celan: In Richtung „Die graue Sprache“

北

彰

要 旨

ツェランは一九五二年ニーンドルフにおける四七年グループの会合に参加した。結果はグループ賞受賞ができず惨めな失敗と言えるものだった。しかし会合を通して彼の詩を高く評価する少数の人々との出会いがあった。その中の一人ドイツ出版社のコッホや、シュレーアスの尽力で、長年の望みであった一冊の詩集を刊行することができたのである。この詩集『ケシと記憶』は大きな反響を呼び、ツェランはドイツ文壇へのデビューを果たすことができた。バッハマンの助力により可能となったニーンドルフにおける四七年グループ会合への参加は、詩人としてドイツ文壇に地歩を築こうとするツェランにとって決定的な転換点となったのである。第二次世界大戦時の体験に形を与えた『ケシと記憶』の上に立って、ツェランはさらに新しい言語表現の獲得を目指し「灰色の言葉」へ向かって歩いていくことになる。

キーワード

四七年グループ、一九五二年ニーンドルフ、詩集『ケシと記憶』刊行、詩集の成功、ドイツ文壇デビュー

一 ドイツ文壇へのデビュー

(1) 四七年グループ

一九四九年にドイツが東西に分裂して別国家となるまで、敗戦の四五年から数年間はドイツの政治情勢はまだ混沌としており、様々な希望を抱きながら未来を見つめる人々がいたのである。その中には理想主義的な動きもあった。雑誌『叫び (Ruf)』がその一つである。雑誌を創刊したハンス・ヴェルナー・リヒターや、アルフレート・アンデルシュは自身戦場に赴き捕虜収容所に収容されていた経歴を持つ。彼らの出発点は、とにかくナチ体制下におけるような政治を二度と繰り返してはならない、というところにあった。ではその為にはどうすればよいのか？ 彼らは、東の社会主義的イデオロギーと西の民主主義的イデオロギーを高い次元で結合した、統一したドイツの国家体制を望んだのである。

隔週刊九〇ペニヒの雑誌は若い世代の支持を得て発行部数は七万五千を数えるほどになっていった。しかし例えば戦犯裁判はドイツ人の手により行うべきであると主張するなど、連合軍及びソ連軍からなる占領軍双方の政策に対してドイツ民衆が無批判に従うことを強く批判し続けたため、占領軍が忌避するところとなり、刊行後僅か八カ月一六号を持って以後発禁とされたのである。

これに抗議して雑誌刊行に代えて集会を開催することにした。当初は一年に二回、後には一年に一回開催された。四七年九月フツセン近郊で第一回集会が持たれたことから、以後この集会組織者及び参加者が四七年グループと

呼ばれるようになったのである。彼らはナチ体制下に生きたドイツ国民にもナチ体制を支えた罪があると考えていた。ナチ体制下の文学や文学者達、ナチ体制を生み出した社会や伝統など、すべてを問題視し根底的な批判を加えたのである。それは「あらゆるものを切り倒す」行為であり、戦後すぐのこういった思想状況は「皆伐」と名付けられた。

このグループは五〇年から文学賞を授けることにした。参加者の中で自分の作品を朗読したい者が、自分の作品を朗読し、参加者がそれを評価したのである。無名の詩人や作家が受賞することで文壇にデビューすることが多く、以後二〇年以上にわたり四七年グループは西ドイツ戦後文学をリードしていく大きな力になった。最初の受賞者は詩人のギュンター・アイヒ、五一年第二回目の受賞者はハインリヒ・ベルだった。いずれも朗読されたのは戦争体験から生まれた作品であり、戦後の瓦礫と廃墟の中で書かれたものである。日本の第一次戦後派と呼ばれる世代の文学に呼応するものと考えて良いであろう。ちなみにベルは一九七二年にノーベル文学賞を受賞している。未遂となった政治的プログラムに対する無念の思いが、無力な政治結社を強力な文学集団にかえたと評されるのも頷けることである。

【五二年春、ウィーン】

ところで一体誰がこの四七年グループの会合に参加するのだろうか？ 実は誰を会合に参加させるかはリヒターが決めていたのである。ではリヒターはどうしてツェランを招待したのか？ 実はバッハマンとミール・ドーアがツェランを招待するように彼に強く働きかけたからなのだ。

一九五二年四月、リヒターはバイエルン放送局と、四カ国占領下ウィーンのルポを書くという契約を結び、連合軍の許可を得てウィーンに入り、十日間滞在したのである。到着翌日に彼はイルゼ・アイヒンガーに会った。アイヒンガーは既に過去二回、四七年グループの会合に参加しておりリヒターを知っていたからである。アイヒンガーの傍らには親しい友人のバツハマンもいたが、彼女は無口な女性だった。リヒターが泊ったのはドーアの部屋である。ドーアも既に五一年の会合に参加しており、受賞したベルに僅か一票差、第二位の票数を得ていた。リヒターのウィーン訪問には実は目的があった。間もなく開かれる五月のハンブルク近郊ニーンドルフにおける四七年グループの会合にオーストリアからの参加者を増やしたいと思っていたのである。

一九三八年から四五年までスイスに亡命し、戦後帰国して当時のウィーン文壇の中心人物となっていたハンス・ヴァイゲルとのインタビュウもリヒターの予定の中に入っていた。彼をヴァイゲルの許へ案内したのは当時アメリカ軍下の放送局「赤―白―赤」に勤務していたバツハマンだった。彼女は自分の仕事を片付けるあいだ彼を三〇分ほど待たせたが、その部屋の机の上には詩の草稿が載せられており、暇つぶしに彼はそれに目を通したのである。「これは誰が書いた詩か？」と尋ねると、赤くなりながら「私です」とバツハマンは答えた。リヒターがバツハマンを五月の会合に招待したのはその日の午後である。

そのバツハマンがツェランも招待するようにリヒターに強く勧めた。実はドーアも既に五一年九月にリヒターにツェランを招待するよう勧めていたのである。しかしリヒターはツェラン招待には消極的だった。ツェランを何とかしてドイツ文壇にデビューさせたいというバツハマンの強い思いが伝わってくる。結果的にリヒターはツェランも招待することになるのだが、後にアイヒンガーに「自分のこの判断は正しかったのだろうか？」と確認したらし

い。するとアイヒンガーはその正しさを受け合ったのだという。

これでリヒターは、オーストリアから新たに二名の参加者を得た。参加者を増やしたいという彼の目的はかなえられたのである。

リヒターのウィーン訪問には面白いエピソードがある。ドーアの部屋には、ツェランも親しく付き合っていたラインハルト・フェーダーマン⁽¹⁾も住んでいたのだが、リヒターが泊った翌朝、二人は急遽部屋の中にある食器や床に敷いてあったカーペットなど一切大切に二つのスーツ・ケースに詰めこみ始めたのだという。いぶかしく思ったリヒターがなぜそんなことをしているのか尋ねると、全くの文無しになってしまったので、それを公益質屋に持って行き金に換えるのだという。ウィーンの市民の半分ぐらいがどんな暮らしぶりをしているのか、その実態が分かるという二人の言葉に誘われて、リヒターは二人と一緒に出掛けた。すると一つしかない窓口の前には長蛇の列ができていて、人々は長時間辛抱強く順番待ちをしていたのだという。その列の中にはまたアイヒンガーもいた。あえてリヒターは声をかけなかったらしいが、戦後間もなくのウィーン市民の暮らしぶり、そしてまた当時の作家たちの貧しさが浮かび上がってくるエピソードである。

【「ニンドルフへの招待状あるいはバッハマンの尽力」】

バッハマンは五二年四月八日付ツェラン宛手紙で、近くツェランがニンドルフでの四七年グループ会合への招待状を受け取ることになるだろうと記し、またツェランがドイツに行くかどうか、また行くとするならいつ行くの

なぜひ知りたいたので、今度ばかりは手紙を寄越してほしいと書いていた。^②

そして同じく五月六日付手紙では、アイヒンガーにもやっと昨日になって招待状が届いているくらいなのでリヒターが招待状を出すのが遅れているのだろう、会合は二三日から二五日まで開かれる予定だが場所はまだまだわからない、滞在費などの心配はしないでいい、交通費は手に入るはず、今度ばかりは行く気があるのかどうか書いてきてくれなくてはいけない、と書いていた。^③

手紙は矢継ぎ早に投函されている。五月六日に続く九日付手紙は次のようなものであった。「リヒターが突然ウィーンにやってきました。すぐ彼と話をしました。すると残念なことに私がひそかに恐れていたことが的中していました。あなた宛の招待状がまだ出されていなかったのです——何かこれといった理由があったからではなく単なる拙劣な組織上の問題からなのですが」。そして滞在費や帰りの交通費の心配は不要なこと、現地まで行く交通費については、クラスやナーニとも図ってウィーンでのツェランの原稿料を充てることにしたことなど、先の手紙でも記したことを繰り返し、その後が続いている。「参加者は誰でも三〇分を使って未発表の詩や散文を朗読できます。でも三〇分すべてを使い切るのではなく二〇分ぐらいにしておいた方がいいと思います。そしてとにかく〈死のフーガ〉を読んでください——何かあろうとも——こんなことを書くのも私の方が四七年グループについては少しばかり知っていると思うからです。そしてどうか原稿を全部持ってきてください。すべてがうまくいくと思います。もちろんあなたが参加したことで、すべてが私たちが望むようにうまくいくと請け合うことはできませんが」^④「良い旅行を、そしてありとあらゆる成功が得られることを！」

この手紙にはバッハマンとドーアがリヒターを机に向かわせ書かせた、ドーアの添え書きのあるツェラン宛招待

状が同封されていた。

このようにしてツェランはニーンドルフの会合への招待状を手にしたのである。事実上バッハマンがツェランの見えないところでツェランのために尽力し、ツェランの招待を可能にしたということがわかる。また経済上の心配を取り除こうと濃やかな配慮をしていたこと、そしていかに彼女がツェランのドイツ文壇へのデビューを強く願っていたかがよくわかる。

(2) 五二年ニーンドルフ

バッハマンの願いは叶ったのか、ニーンドルフの現実はどのようなものだったのか。それを知るためには、参加者の声を拾い上げるのが適切というものだろう。

まずはツェラン自身の言葉である。

ジゼル宛のツェランの手紙には大要次のように記されている。「受付でぼくはリヒター夫人からフランス人と間違われて、完璧なドイツ語を話しますねとお世辞を言われた。ぼくが好きなドーア共々ウィーンからやってきた参加者は深夜に到着し、みなたくたくに疲れていた。翌日、朗読はホテルのホールで行われ五〇人ほどの聴衆がいた。最初の（戦闘）が始まった。朗読、それから批評の介入。夜九時にぼくの番になった。ぼくは大きな声で朗読した。稀にしか好意を示さない人たちの頭上を越えて。リヒター、会の主催者でリアリズムの主唱者はぼくに反発した。詩を愛さない人達、反発したのは彼らだった。」⁵⁾

リヒターは後に次のように回想している。「ツェランはおどおどしていて、感じやすく、自分が場違いのところ

にいうという思いがあり、おそらく心乱されていて、笑うことができなかつた。彼の声は甲高くて気に入らなかつた。また朗読の仕方も熱が入りすぎていた。私たちは情動的になるのを止める習慣になつてからもう久しかつたのだ。また彼の朗読のスピードも速すぎた」「彼はシナゴーグの中でのように単調に朗読した」と。^⑥

後に大学教授となり文芸批評家ともなつたヴァルター・イェンスは、五〇年から四七年グループに参加しており、既に小説を書いていて、当時は作家への道を辿つていた。その彼は後に次のようにあけすけに語っている。「ツェランが初めて登壇した時、人は言つたものだ、『こんなものとてもじゃないが聞いていられない』と。ツェランが大変情熱的に朗読したからだ。私たちはそれを笑つた。誰かが『まるでゲッベルスのように読んでゐる！』と言つた。笑殺されてしまつたので、フランクフルトから来たアナウンサーのヴァルター・ヒルスベルガーがもう一度詩を朗読しなければならなかつた」と。^⑦

ツェランの友人ドーアはどうか？

「リヒターは、ツェランの朗読を評して、シナゴーグの中でのように単調に朗読した、と言つたが、それは大体のところあたつてゐる、パウルは重苦しい不安な気持ちの中で、本当に下手にそしてまたほとんど歌うようにして朗読したので」。「ツェランは、ドイツではまだ知られてゐない〈死のフーガ〉を含む自作詩を、とりわけ上手とは言えない仕方で朗読した、いや無惨な仕方で朗読したと言わなければならぬ」。^⑧それが友人の率直な批評だつた。そしてこの会合でツェランの詩に一票を入れ、この後ツェランの良き友人、良き助力者となつたロルフ・シュレーアスも次のように述べてゐる。「ツェランの〈預言者〉のような朗読の仕方は四七年グループのスタイルに合わなかつた、彼の否定しようのない情熱もふさわしいものではなかつた」と。^⑨

つまりツェランの朗読は失敗に終わったのである。ツェランは四七年グループに受け入れられることはなく、この機会を機にドイツ文壇デビューを果たさそうとした野心も無惨な形で潰えたのである。

【朗読の仕方——四七年グループとの断絶】

ツェランが受け入れられなかった大きな理由が、彼の朗読の仕方にあることは参加者の発言から明らかである。当時の四七年グループの中で支配的な考え方、それは醒めた目で現実を認識し、それを即物的に、情念を排して表現することを良しとするものだった。ナチが、情念に訴え人間を動かし、それが冷静に現実を見据えることを妨げ、政治的判断を誤らせたという反省に基づいていたのであろう。

ところがツェランはそういった支配的風潮を知ることもなく、またそういった風潮とは無関係に、あくまで「自分の詩」を「自分流に」朗読した。ロマン派的な思い入れを込めた朗読と解され、しかも時代から大きくずれ、あるうことかまるで「預言者風」とすら思わせる仕方である。だから失笑をかい「笑殺」されたのである。

先に記したイエンスの言葉の中にある「ゲッベルスのように」という表現はしかしツェランの心を深く傷つけた。様々な証言があるのでそれが事実だったかは不明である。リヒターによれば次のようなものだった。

「ゲッベルスのように、と言ったのは私である。しかしそれはツェラン朗読後公式の席上で言ったのではなく、朗読の翌日の昼食時に、ごく親しい人たちと席を共にしていた時、《ツェランの声を聞くとゲッベルスの声を思い出してしまう》と漏らしてしまったのだ。それを知ったツェランは私に弁明を求め、私をかつてのナチと同じ立場に立つものであるとして私を追い詰めようとした。アイヒンガーとバッハマンは泣いて涙を流しながら私に謝るよ

うにと懇願し、私は謝ったのだ。ツェランはそのことを決して忘れなかった」⁽¹⁰⁾。

ドーアによれば大要次のようなことになる。

「二インドルフでの会合の後、北西ドイツ放送の客としてハンブルグにまだ滞在中、リヒターの私的な発言を知ったツェランは、これをスキャンダルになると脅したので、イルゼが夜既にベッドに入っていた私の部屋に突然やってきて、騒ぎにならないよう二人の仲を取り持つてほしいと懇願した。それを受けて私がリヒターに話し、翌日ホテルのホールに降りる階段上で、ツェランに会ったりリヒターがツェランに謝罪したのだ。硬い表情ながらしかし全く適切な言葉⁽¹¹⁾で」。

しかしそれにしても、ナチに殺された母の墓碑銘でもある「死のフーガ」の朗読に対して、「ゲッベルスのように喋った」と評するのは実にグロテスク極まりないことである。

シヨアの実情が、現在ほどまだ広く知られていなかった事も、あるいはツェランと四七年グループの間に断絶を生んだ背景として存在するのかもしれない。アラン・レネの映画『夜と霧』がカンヌ映画祭で騒動を起こしたのは五六年、四年後のことである。「アウシュヴィッツ」という単語もまだ市民権を得ていなかった。

あるいは、もしツェランが「死のフーガ」を朗読する前に、「死のフーガ」を書いた日時・場所・背景などを述べていたら聴衆の反応はどうであつたらうか？ 日本⁽¹²⁾の和歌における「ことばがき（詞書）」のように。テキストの自立性をゆがめる行為として非難を受けたか、あるいは聴衆は静かに朗読に聞き入つただらうか？ ツェランと四七年グループの間の断絶とは質を異にする問題であるが、「詩」の形式そのものが持つ本質的な問題としても考えることができるのではないか、というのが筆者の考えである。

【デームス宛ツェランの手紙】

ツェランは未来の妻ジゼル宛には意識的に輪郭をぼかした表現で会合のことを伝えていたが、友人クラウス宛五月三一日付手紙では、以下のように直截的な表現で書き送っている。

「起こったことすべてをどう受け取るべきなのか言うのが難しい——刺激的であり、しかしまた殆ど全く水準以下のものだった。

インゲはまたぼくをひどくがっかりさせた。つまり彼女はぼくを否定し、彼女とぼくを競わせることまでしたのだ——ぼくの詩ではなく、彼女の詩が評価されるものとして残り、ひとかどの詩人として話しかけられることを受け入れていたのだ、幸運に向かつて微笑みながら……。

しかもこの成功たるや決して純然たる文学的理由からだけではなかった。その後彼女はぼくのところへやってきて尋ねたのだ、自分と結婚したくないかと。そして雑誌『文学 (Literatur)』、つまり四七年グループの雑誌上に発表される一編の詩に、タイトルをつけてほしいと頼んできたのだ。ぼくはタイトルを見つけてやったよ……彼女の詩の中から一行を取り出して——そして人々はそれにお祝いのお言葉を述べたのだ。彼女はそれを受け入れて嬉しそうだった。

ぼくの出発前には、わずかな時間だったがぼくの部屋にやってきて、完璧に打ちのめされた女を演じ、未来の一かけらを恵んでくれるようにぼくに哀願したのだ。恵んでやったさ。

ぼくはここで辱めを受けた——インゲをハンブルクに連れてきたリヒターは、ぼくが詩を〈ゲッベルスのよ

うな喋り方」で朗読したのでなお一層ほくの詩が嫌になったと言ったのだ。^{*} こんなことをほくは経験しなければならなかったのだ。そしてこの会合に参加するようにほくに勧めたインゲは、こういったことに対して沈黙したままなのだ！

それでもとにかくほくに票を投じてくれた人も何人かはいた……。(中略)

クラウス、ほくたちは全く孤独であるということはない、しかし、なおひどく孤独なのだ。

(後略) * (死のフーガ) の朗読の後でだ！⁽¹²⁾

この手紙を書いた後ツェランは、自己の非を他人のせいにし恥じることがない独善にさすがに気がひけたか、六月初め旅先のフランクフルトから「この手紙は感情的になって書いたもので、部分的に公正ではなく、また愚かなものだった⁽¹³⁾」とデームスに書き送っている。

手紙からはまずツェランのバッハマンに対する怒りあるいは妬みが伝わってくる。そしてリヒターの「ゲッベルス云々」という言葉に対して「辱めを受けた」という怒りが。

【ツェランとバッハマン】

ではなぜツェランはこれほどまでにバッハマンに対して怒りをぶつけているのだろうか。またそもそも二人はニーンドルフでどのような出会い方をしていたのだろうか。以下は五二年七月一日付ツェラン宛のバッハマンの手紙である。

「(前略) ナーニとクラウスに会いました。彼らにあなたのことやドイツでの日々について話すのは私にとってひどく困難なことでした。あなたが私に対して距離を取り始めてから後、あなたが今ドイツでのことにどう向かい合っているのか、一層私にはわからなくなっているからです。私自身にも、なぜあれほどの緊張状態になってしまったのかまだ解りません。ただはっきり解ったのは、私たちが最初に交わした会話が、それまでの私の努力と希望を全く台無しにしてしまうものだったということであり、またかつて私があなたを傷つけたよりも、より深くあなたの方が私を傷つけることができたということだけでした。私がどのような形であれ、あなたと「原始林」の中に入っていくよう、あなたを再び取り戻そう、あなたの許へ行こうと固く決心したまさにその時に、あなたが私に向かって言った言葉を、あなたがまだ覚えてるかどうか私にはわかりません。それに加えて、あなたが誰かほかの人の許へ行ってしまったのだということを私が知ってしまった数時間後ないし数日後になっても、私がこのドイツの「原始林」の中で、あなたの傍らに立ちあなたの力にならなかったからと言って、どうして私を非難できるのか、それだけは私にとつて理解できないのです。はるか以前から私の許から離れ去ってしまったあなたの傍らに、どうして私が居続けられるのか言ってください。それがもうずっと以前に起こってしまったことなのに、それを感じ取ることもできず、予感することもできなかつたことを思うと、私の心は冷えてひどく冷たくなってしまうのです」。

バッハマンはニーンドルフで初めてツェランにジゼルという女性がいることを告げられたのである。その折の思いを率直に述べている手紙と言えよう。既に「友人としていたい」というツェランからの手紙を受け取っていたに

も拘わらず、バッハマンはまだツェランへの思いを捨てきれず、自分に都合の良いように二人の関係を考えていたのである。あれほどにツェランの将来を考え、ニーンドルフ参加への道筋を整えるために力を尽くしていた彼女を考えるに心が痛む話である。

しかしなぜ不条理と思えるほどにツェランはバッハマンに立腹したのか、そこにはツェランが持っていたバッハマンに対する優越意識があったように見える。年齢的にもバッハマンよりも上であり、また詩作の上でも彼女よりも一日の長があると考えていた。いわばバッハマンは彼の「生徒」だったのである。

詩人が自分の詩のタイトルを決める際に、他人にそれを依頼する、というようなことが普通考えられるだろうか？ とところがバッハマンは実際にそういったことをしたのである。「暗く曖昧なことをいう」というのがタイトルとしてツェランが選んだ言葉であり、その詩は事実四七年グループの雑誌『文学 (Literatur)』に掲載されたのである。ツェランの詩は掲載詩に選ばれなかったのだが。

この「先生」と「生徒」の上下関係が、ツェランの目から見ると、ニーンドルフの会合で逆転してしまったのである。ツェランのプライドはそれを許せなかった。

またツェランが「純然たる文学上の理由からではなく」というのにも一理あった。

ドーアの見方によると、リヒターはバッハマンに「気があった」のだ。イェンス夫人やリヒター夫人もいたが、男の参加者たちの視線が、オーストリアから参加した可愛い独身女性二人、アイヒンガーとバッハマンに向かっているのは、殆ど避けようもないことだったのである。リヒターがツェランに対して対抗心を持っていないければ、ツェランの朗読に対してあれほど酷評することもなかったろう、というのがドーアの意見である。

バッハマンの不安でおどおどした態度はエレガントさと混じり合っていて、その彼女の振る舞い方が、男たちの保護本能を掻き立てたのだという。

ついでに言えば、バッハマンの朗読もあまりいただけないものであったらしい。一つの詩から次の詩へと移るたびに小声になっていき、ついには声を出せなくなってしまったと言われている。

【ツェランに票を入れた人たち】

しかし会の受賞者を決めるため、会合の終わりにリヒターが帽子を持って回り、票を集めて回った票決では六人がツェランに投票したのである。その中にはギユンター・アイヒ、イルゼ・アイヒンガー、パウル・シャリュック、ロルフ・シュレーアスなどがいたのである。シャリュック、シュレーアスの二人はこの会合の後、ツェランと親しく付き合い始め、後にはベルを含め、ツェラン研究者ヴィーデマンから「ラインの友人たち」と称されることになる。

最高の票数は一六票のアイヒンガー、次点が一四票のイエンス、そして第三位がツェランの六票だった。賞を逃したとはいえ、六票を得ているのは大きなことだ。決選投票でアイヒンガーが二七票、イエンスが一八票となり、五二年のグループ賞はアイヒンガーと決まり、ドイツ出版社が提供した二千マルクの賞金を得たのである。当時の二千マルクは市民の平均給与の六カ月から七カ月分にあたった。

付言するならばバッハマンが賞を得たのは翌五三年、そして五四年にはドイツの代表的な週刊誌『シュピーゲル』八月一八日号の表紙を飾り、一躍「時の人」となったのである。

(3) 詩集『ケシと記憶』

【ドイツ出版社】

前述の人達の他にツェランを認め高く評価したのが、長身・金髪・碧眼の典型的ドイツ人で新しい文学的才能を求めていたドイツ出版社のヴィリィ・A・コッホだった。ニーンドルフで彼はツェランに、パリへの帰途シュトゥットガルトのドイツ出版社に寄り、六月六日に朗読会を開くことを提案している。フランクフルトからシュトゥットガルトまでの交通費は出版社負担である。ドイツ出版社は当時の西ドイツにあって大手出版社の一つであった。

信じられないことだがこれをツェランは直前に電報でキャンセルしている。「パリからの予想外の電話があり」⁽¹⁵⁾とその理由を述べているが、事実は不明である。あるいはジゼルとの結婚を確かなものとするのが何よりも当時のツェランにとって大事なことであり、ジゼルからの電話を受けて恋人の許に一日も早く戻ることを優先したのかもしれない。あるいはまたニーンドルフでの体験から、ドイツ出版社からの話に対して大きな期待を持たなかったからなのか。

コッホは六月二五日ツェラン宛に要旨次のような手紙を出している。「あなたとあなたの詩が私に与えた印象は今でもまだ私の心の中で減じることなく強く生き生きとしています。いま私の手許にあるあなたの詩は三編だけです。それを社内でも朗読しましたが好評でした。もっと多くのあなたの詩を読みたいというのは私だけではなく出版社の望みなのです。できるだけ早くあなたの手許にあるあなたの詩を送ってください。刊行を真剣に検討したいのです」と。⁽¹⁶⁾ また社内会議への提案の中でも「ツェランはドイツではまだ全く無名の並々ならぬ才能を持った

詩人であり、このような詩人が見出されるのは実に稀なことなのだ¹⁷と記していた。

実は前日六月二四日に、シュレーアスはシュトゥットガルトに行きコッホに会ってツェランのことを話していたのである。彼は当時ドイツ出版社の社外原稿審査員を務めると共に、作家としてドイツ出版社から自作を出版しており、ドイツ出版社とは深い関係があつた。コッホの手紙と同日付の六月二五日、彼はツェランに「ドイツ出版社がツェランの詩の草稿を欲していること、また詩集出版の見込みがあること」¹⁸などを手紙で知らせている。シュレーアスはツェランの詩を高く評価しツェランを世に出したいと願っていた。ツェランの詩集刊行にあたって、彼は実に大きな力添えをしているのである。ニンドルフで彼と出会えたことはツェランにとって幸運なことであつた。

小説出版のためドイツ出版社を訪れていたバツハマンも、七月一〇日付手紙でツェランに対し、コッホが朗読会中止をひどく残念がつていたと伝えるとともに、ドイツ出版社に詩の草稿を送るように強く勧めていた¹⁹。

結局七月二一日にツェランはドイツ出版社で朗読会を開いた。デームスやナーニと会う目的もあり、オーストリアでジゼルとともに休暇を過ごそうとしていた、その途上に立ち寄つたのである。しかしデームスやシュレーアス宛の手紙²⁰によると、ツェランはこの朗読会が失敗であり、詩集刊行は期待できないと思つたようである。二〇人ほどの前で朗読し、夕食に招待され、少し希望を抱かせられたが、一六編のみの詩選集の刊行企画で、コッホが書いてきたほど出版社の他の人間は自分の詩を認めてくれないようだ²¹と記していた。

事実コッホはシュレーアス宛手紙で大要次のように述べている。「ツェランは私達のところにやってきて出版社内で朗読した。出版社の友人達も招待した。確かに大きな成功とは言えなかったが、しかし二、三人の聴衆、とり

わけヘルマン・カーザクに、消し難い強い印象を与えた。カーザクはツエランの詩集を無条件で出版するように助言したのだ」と。⁽²¹⁾ 真の意味での国内亡命者だったとも評されるカーザクは一九四七年に刊行した『流れの背後の都市』で一躍著名作家となり、五二年には南ドイツ作家同盟会長を務めていた。

後にツエランと親しく付き合うようになったヘルマン・レンツも、ツエランの朗読の仕方に驚いており、ツエランの詩をよく理解できたとは言えないが、それは他の聴衆も同じだろうと述べていた。

しかしドイツ出版社はツエランの詩集『ケシと記憶』刊行を決めたのである。五二年八月七日コッホはツエランに、出版社が詩選集ではなくすべての詩を一冊の詩集として刊行する決定を下したことを伝えている。一五〇〇部の印刷、原稿料は三〇〇マルクだった。

コッホに対してツエランは感謝の手紙を書いている。「あなたのお手紙を読んだ際の喜びは言葉では言い表せないものでした——できればすぐにもあなたのもとに駆け付けてあなたに感謝を申し述べたいところでした!」⁽²²⁾と。そしてまた同時に社主のヘルムート・ディングルデイ宛にも感謝の手紙を書いているが、そこでは次のように記していた。「コッホ氏からの手紙は、私にとってまさに報せでした——この数年のうちに手にした他のどの報せもこれに匹敵するものはないそういった類の報せだったのです。コッホ氏のお手紙は限りない不確かさと曖昧さからの解放と、また殆ど全てのことがかそれにかかっている未来への確信とを私に齎してくれたのです」⁽²³⁾と。

シュレーアスもツエランにドイツ出版社の決定を伝えていた。ツエランは彼に、「もちろんとてもほくは幸せだ、ほくはどれほどあの人たちやあの人たちの思いを分かっていた事だろう! ほくの詩のために、新しい岸辺に向かって橋が架けられる瞬間がやってくることほど、ほくが心から願っていたことはない——いまほくは少しば

かり不安なのだ、詩の後に従っていかねばならぬことに」⁽²⁴⁾と書いている。

【詩集の成功】

こうして詩集は五三年一月から市場で売り出された。出版社との契約では重版の場合の原稿料の取り決めはなされていなかった。想定外のことだったのである。ところがこの詩集の反響は出版社を驚かせるほどのものだった。完全に無名の詩人が初めて出版した詩集であるにも拘わらず出版後一年で品切れとなり、五四年には再版されたのである。「なんて奇妙なことだ、なんて素晴らしいことだ、こんなことが起こるなんて、なんて奇妙で素晴らしいことだ」⁽²⁵⁾と再版を知ったツェランは書きつけている。

詩集を出版社から送られたヘルマン・ヘッセは次のような感想を出版社に書いて寄越した。「パウル・ツェランの詩集は実際強い印象を即座に私に与えました。素晴らしい才能です。この詩人が良き伝統との繋がりを喪失することなく、他方では意識的に伝統から断絶するという、新しい試みを敢えて行っている、そのやり方は私にとって大変好感が持てるものです」⁽²⁶⁾と。この感想は詩集宣伝文句として早速出版社が使うことになったのである。

書評が出るのも早かった。ラジオ放送、地方紙、全国紙、文芸誌や芸術誌などで取り上げられたのである。

地方紙『ターゲスシュピーゲル (Tagesspiegel)』のヴァルター・レニヒの批評は的確なものだった。

「どの詩行からも気づかさされることだが、ここではいかなる気の緩みも許さない、厳しい芸術家が仕事をしている。また彼は存在し得るものだけを作品として刊行するに足る十分な知性も持ち合わせている。ここにおけるように、才能と自己批評とが秤で平衡を保っているところ、新しい響きが惑わすようにして耳に届くところ、個性的な

表現世界がこれほど突然にまた十分に私達の目の前に置かれるところにあつては、人はその価値を貶めることがあつてはならない——ツェランはこの薄い詩集であらゆるドイツの若い詩人たちの尖端に己を位置付けたのだ」。彼の詩は「終始冷静沈着な哀しみのトーン」に貫かれていてと。⁽²⁷⁾

すなわち「ツェランのデビューは常でない注目を引き起こした——一つの成功の物語」⁽²⁸⁾だったのである。ちなみに詩集『ケシと記憶』は今も版を重ねている。戦後出版された抒情詩集でこれほど長く版を重ねている詩集は他にないのでないか。次の詩集『園から園へ』をツェランは同じドイツ出版社から刊行することになるのである。

(4) ニーンドルフの豊かな稔り

デームスに向かいあのような形でニーンドルフの会合での不首尾の鬱憤を晴らしていたツェランであったが、そのニーンドルフの会合は実はツェランに豊かな稔りを齎したのである。

稔りは詩集『ケシと記憶』の出版に止まらなかつた。

ニーンドルフの会合後ハンプルクで何人かが北西ドイツ放送のラジオで朗読することができたのだが、ツェランもバッハマンと共に自作の詩を二三編朗読することができたのである。北西ドイツ放送はニーンドルフの会合を財政的に支援し社員保養所を宿舍として提供したいわば見返りに、参加者のうちから選び出した作家や詩人を使い放送番組を作成したのである。当時はテレビではなくラジオが隆盛を極めておりラジオドラマがもてはやされていた時代だった。ラジオで朗読できるのは大きな事件だったのである。パリでも聞くことができる二〇分番組出演謝礼は四〇〇マルクだった。

またハンブルクでは、北西ドイツ放送の統括責任者をしていた作家エルンスト・シュナーベルと知り合った。後年彼がベルリンに移ってから付き合いは続き、一九六七年にはツェランの初めてのテレビ朗読実現に尽力している。ツェランはジゼルに、彼が大変親切にしてくれたこと、夏にパリに来てツェランを訪ねてくるだろうこと、会えばきっとジゼルも彼を好きになるだろうこと、⁽²⁹⁾を書き送っている。作家ハンス・エーリヒ・ノサックもまたツェランに大変親切だったという。後に『ケシと記憶』を有名な詩人ヴェルヘルム・レーマンに推薦している。

帰途立ち寄ったフランクフルトでも六月五日に朗読会を持つことができた。泊ったのはニンドルフで知り合った作家の自宅である。シュレーアスも泊るように誘ってくれたが、彼の自宅に「あまりにも多くのおぞましい過去を伺わせる痕跡」⁽³⁰⁾があったせいか、口実を設けて断っている。彼は戦時中、中尉としてイタリアでパルチザン掃討に関わり、彼の父はSSの旅団長であった。

フランクフルトではまたベルにも会っている。かつて編集者として彼の詩を雑誌『変容 (Wandlung)』に掲載してくれた女流作家マリー・カシュニッツ夫妻から親切なもてなしも受けた。後にツェランが一九六〇年ビュヒナー賞を受賞した際、彼を讃える講演をした人である。

五月末には同じフランクフルトで、一九五〇年からフィッシャー出版社の主任原稿審査員を務めており、五二年からは同出版社刊行の雑誌『新展望 (Neue Rundschau)』⁽³¹⁾ 発行人となるルードルフ・ヒルシュと初めて出会い、ジゼルには「カフカの発行者を訪問した」と知らせている。ヒルシュはユダヤ人でありツェランより一五歳年長。第二次世界大戦開戦後はオランダに亡命し、オランダがナチ支配下にはいった一九四〇年五月以後は、アンネ・フランクのように身を隠し、母と兄共々幸い生き延びることができた人である。芸術に造詣が深く眼識もあり尊敬されて

いた。当初からツェランと信頼に満ちた関係を結んだ。

彼はツェランに早速翻訳を依頼し、五二年一〇月にはフィッシャー書店発行の雑誌に翻訳詩四編が掲載された。五三年第二号の雑誌『新展望 (Neue Rundschau)』にはツェランの詩五編が掲載されている。この雑誌は東ドイツでペーター・フーヘルが発行していた『意味と形式 (Sinn und Form)』誌と共にその質を高く評価された雑誌である。ヒルシユは単なる出版人に止まらずツェランの困難な時期にはツェランの相談にのり連帯して行動をとった。ツェランが一九五八年にブレームン文学賞を受賞する際にも、また一九六〇年にビュヒナー賞を受賞する際にも重要な働きをしたとみられている。

以上述べてきたように、現象的にはニンドルフにおける四七年グループ会合参加は失敗のように見えるが、事実としては大きな稔りをもたらした大成功だったと言えるのである。何より長年心から願ってきた詩集刊行に繋がった。またドイツの作家や詩人の中に友人を得ることができ、しかも彼らはツェランに助けの手を差し伸べてくれたのである。

またドイツ出版界に知人を得ることもできた。そのことは、ドイツの作家や詩人との人間的繋がりに加えて、以後ツェランがドイツ文壇に地歩を築くために大きな役割を果たすことになるのである。

(5) 日本人ドイツ文学者の眼

一九五四年六月、当時東京大学ドイツ文学科教授だった手塚富雄がツェランにパリで会っている。ヴァルター・

ヘレラーの紹介だった。二人はヘレラー宛に次のような絵葉書を出している。

「親愛なるヘレラー博士、手塚博士と会えるようにしていただきありがとうございます！　そもそも日本語ができないのが恥ずかしいのですが——詩がたとえ僅かでも日本語を喋ってくれることを願っています！　あなたのパウル・ツェラン。親愛なる博士！　ツェラン氏と一時間ばかりカルチュラタンで話すことができました——パリでドイツ語を話す最初です……面白い状況です。心からの挨拶を。あなたのT・手塚」⁽³²⁾

帰国後に手塚は「パリの無国籍詩人」と題してこの時のことを書いている。⁽³³⁾ 以下その文章から適宜抜き出して、彼がどのような思いを持ったか、その一端を紹介してみよう。

「ツェランはその出生において境遇において現代人の苦難を代表していると言ってよいだろう。彼の身の上は幾百万の事例の一つだ。戦禍の中で流浪を経た後、パリに落ち着いている。そういう彼には国籍がないとヘレラーは言う。『ケシと記憶』という薄い詩集をドイツ詩壇に送って名を成した。国境を越えやってきた彼のような詩人からは現代の人間の新しい声が聞こえてくるかもしれない。

ヘレラーが私に描いて見せたツェラン像はスタイリストとしてのそれであった。《ハイネのように詩人的だぜ》と彼は言った。そういう詩人的な詩人が書く詩を読むことは苦しめないが、逢って見てどんな感情的な難儀を味わわれるかは、ふたを開けるまで分からなかった。

会ってみると、詩人的云々というヘレラーの言葉は彼の思い違いだと感じた。この人からは自分の感情の皮膚をそれほど手荒くこすられることを覚悟しなくていいだろう。ただ眼がつぶらなことで、どことなく沈んだ影が漂っていることが、詩人的という印象を誘うかもしれないなかった。彼は今三〇代の半ばである。体は大柄ではなく、青年風というより、落ち着いた成人の風格である。一七歳年長の私だが、生活体験や精神年齢において、ちょうど彼と釣り合うと言っているらしい。

今の詩人は前時代者より謙遜であるとツェランは言った。またいずれにせよ現代の詩人はすべてを新しく始めていかねばならないのだと。ベンは過大評価されている、人生と人間を離れて詩はあり得ないのだからとも言ったが、それはベンの抽象的遊離傾向を意識しているからだろう。

どうもあなたがドイツ語をこんなに話すのに、自分が日本語を少しも知らないのは恥ずかしい。自分は日本の詩だっけといふん読みたいのだ、とも言ったが、それはお世辞というより、ある程度の実感から言っているらしかった。

ツェランの感じはむしろ温和で目立たぬ人柄である。口に出さぬ苦難の経歴があるだろう。特異な境遇から生い立ったこの人が、詩人としての程度に力をのばすかは、これからのことである。新しい文学史にも一応登録された彼ではあるが、恵まれなければこのままで消えてしまうこともあり得る。氣遣われるのは、ヨーロッパの厳しい市民生活が、この孤独な詩人の素質や存在などは斟酌も無く押し潰してしまふことだ。冷たいその空気の中で、自分の進路を守ることは容易でないだろう。殊にこのパリでは「

「このままで消えてしまふこともあり得る」ツェランの将来を手塚は冷静に慮っている。事実ツェランが置かれ

た状況はそういったものであつたろう。一方ツェランが「日本語ができないことが恥ずかしい」と語っているのが印象的である。

(この稿続く)

注

(1) ラインハルト・フェーダーマンは一九二三年ウィーン生まれ、ツェランより三歳年下である。以下ドーアの記すところによる。

「フェーダーマンの父は二分の一ユダヤ人だった為に職を解雇され、自身は四分の一ユダヤ人であつたが四二年に召集され従軍、四四年から敗戦までロシアの捕虜となつた。戦後家に戻つてみると母は既に亡くなつていた。従軍していた兄が行方不明となり、弟が武装SSからの召集を逃れようと逃亡を図り逮捕され、フェーダーマン自身の消息も不明だったため、三人の息子全員が死亡したものと思い込んだ父は絶望してドナウ河に身を投げて自殺していた。兄は戦場で負傷したが命をとりとめた。しかし弟は戦後の混乱期の中で疎外感と、父の死に対する罪責感に苦しめられ、耐え切れず自殺してしまつたのである。」

「揺るぐことのないオペティミスト」であるフェーダーマンは、見てきたこと、体験してきたことを証言すべく作家活動を始めるのだが、ツェランと会い親しくなるのはこの頃のことである。

- (2) Ingeborg Bachmann-Paul Celan: *Herzeit, Der Briefwechsel*, Suhrkamp, 2008, S. 45f.
- (3) Ebd., S. 46f.
- (4) Ebd., S. 48f.
- (5) Paul Celan-Gisèle Celan-Lestrange: *Briefwechsel Bd.1*, Suhrkamp, 2001, S. 21f.
- (6) Ebd., Bd. 2, S. 52.
- (7) Theo Buck: *Paul Celan und die Gruppe 47*, In: *Celan-Jahrbuch 7* (1997/98), 1999, S. 78.; Joachim Seng: *Flaschenpost ins Land der Täter*, In: *Mohn und Gedächtnis*, DVA, 2000, S.81., Paul Celan-Gisèle Celan-Lestrange: a. a. O., Bd. 2, S. 52., Helmut

- Böttiger: Die Gruppe 47, DVA, 2012, S. 135., Barbara Wiedemann: Ein Faible für Tübingen, Klöpfer & Meyer, 2013, S. 21., Helmut Böttiger: Wir sagen uns Dunkles, DVA, 2017, S. 124., Theo Buck: Paul Celan, Böhlau, 2020, S. 109.
- (8) Milio Dor: Auf dem falschen Dampfer, Paul Zsolnay, 1988, S. 213f.
- (9) Theo Buck: a. a. O., S. 78.
- (10) Helmut Böttiger: Wir sagen uns Dunkles, DVA, 2017, S. 125f.
- (11) Milio Dor: a. a. O., S. 214.
- (12) Paul Celan-Klaus und Nani Demus: Briefwechsel, Suhrkamp, 2009, S. 100f.
- (13) Ebd., S. 101.
- (14) Ingeborg Bachmann-Paul Celan: a. a. O., S. 50f.
- (15) Barbara Wiedemann: a. a. O., S.35.
- (16) Joachim Seng: a. a. O., S. 81.
- (17) Ebd., S. 82.
- (18) Paul Celan: Briefwechsel mit den rheinischen Freunden, Suhrkamp, 2011, S. 8f.
- (19) Ingeborg Bachmann-Paul Celan: a. a. O., S.50.
- (20) Paul Celan-Klaus und Nani Demus: a. a. O., S. 100f., Paul Celan: Briefwechsel mit den rheinischen Freunden, Suhrkamp, 2011, S.11f., Jan Bürger: "Befreit von tausend Ungewissheiten", Wie der Lyriker Paul Celan entdeckt wurde, In: Mohn und Gedächtnis, DVA, 2012, S. 85.
- (21) Barbara Wiedemann: a. a. O., S. 40.
- (22) Jan Bürger: a. a. O., S. 86.
- (23) Ebd., S. 86., Paul Celan: Briefe 1934-1970, Suhrkamp, 2019, S. 130f.
- (24) Paul Celan: Briefwechsel mit den rheinischen Freunden, Suhrkamp, 2011, S. 14f.
- (25) Joachim Seng: a. a. O., S. 84.
- (26) Ebd., S. 87f.

- (27) Ebd., S. 84f.
- (28) Jan Bürger: a. a. O., S. 82.
- (29) Paul Celan-Gisèle Celan-Lestrange: a. a. O., S. 23.
- (30) Ebd., S. 24.
- (31) Ebd., S. 23.
- (32) Helmut Böfinger (Hrsg.): *Elefantenrunden*, Literaturhaus Berlin, 2005, S. 43.
- (33) 手塚富雄『手塚富雄著作集六』中央公論社、一九八一年、一八一—一八七頁。

* 以下注記に上げなかった参考文献である。

- Paul Celan-Hanne und Herman Lenz: *Briefwechsel*, Suhrkamp, 2001.
- Hans Werner Richter: *Im Erblissenment der Schmetterlinge*, Carl Hanser, 1986.
- Thomas Sparr: *Todesstübe, Biographie eines Gedichts*, DVA, 2020.
- Hans Werner Richter (Hrsg.): *Almnach der Gruppe 47*, Rowohlt, 1962.
- Heinz Ludwig Arnold: *Die Gruppe 47*, Rowohlt, 2004.
- Peter Golems und Marcus G. Patka (Hrsg.): *Displaced*, Suhrkamp, 2001.
- 相沢啓「二つの『ルーフ』をめぐる」(『詩・言語』第二三号、一九八四年)一一三八頁。
資料を博搜し雑誌の歴史の経緯を詳しく論じている。アンデルシュ研究(一)であり、リヒターに批判的である。

